

ISSN 2186 – 3989

中国文学外国語翻訳研究最前線の課題、今後の趨勢
及びいくつかの提案

許 鈞（著）、項永坤（訳）、盧冬麗（訳）、二ノ宮聡（校閲）

Frontiers, Trends, and Suggestions for Research in Foreign Language
Translation of Chinese Literature

By Xu Jun (Author), Xiang Yongkun (Translator), Lu Dongli (Translator)
and Ninomiya Satoshi (Editing)

北 陸 大 学 紀 要
第57号(2024年9月)抜刷

中国文学外国語翻訳研究最前線の課題、今後の趨勢 及びいくつかの提案

許 鈞* (著)、項永坤** (訳)、盧冬麗** (訳)、二ノ宮聡*** (校閲)

Frontiers, Trends, and Suggestions for Research in Foreign Language
Translation of Chinese Literature

By Xu Jun (Author), Xiang Yongkun (Translator), Lu Dongli (Translator)
and Ninomiya Satoshi (Editing)

Received April 30, 2024

Abstract

Translation of Chinese literature into foreign languages has a long history, made significant progress, and has achieved remarkable results in related research. This paper discusses the focus and forefront issues of translation research, as well as future trends to be noted. Firstly, there is a need for a diachronic perspective on the essential characteristics of translation. Secondly, cognitive studies of translation. Thirdly, research on translation education. Fourthly, the issue of foreign language translation and dissemination of Chinese discourse. Fifthly, research on the history of translation. Furthermore, in order to deepen the research on foreign language translation and construct a translation theory with Chinese elements, several studies need to be completed. Firstly, strengthening systematic research based on the process of literary translation introduction and translation generation. Secondly, deepening research on translators, especially the exploration of translator subjectivity. Thirdly, strengthening research on language and aesthetic dimensions. The most important thing is to establish a correct view of the history and values of translation. This will accurately position the foreign language translation of Chinese literature and fully recognize its social, linguistic, cultural, creative, and historical values.

Key Words : Foreign language translation of Chinese literature, generation process, translator research, language and aesthetics, translation values.

本稿は、中国で公開済みの次の 2 編の論文を翻訳・監訳したものである。

1. 『外语与外语教学』2021 年第 6 号に掲載された『关于深化中国文学外译研究的几点意见』、pp68-72.
2. 『北京第二外国语学院学报』2022 年第 3 号に掲載された『当下翻译研究的前沿问题与未来趋势——在曲阜“全国第二届‘译者行为研究’高层论坛”上的报告』、pp4-11.

* 浙江大学文系アカデミー Chair Professor of Humanities, Zhejiang University

** 南京農業大学外国語学院修士二回生 College of Foreign Studies, Nanjing Agriculture University

** 南京農業大学外国語学院准教授 College of Foreign Studies, Nanjing Agriculture University

*** 北陸大学コミュニケーション学部講師 Faculty of Communication, Hokuriku University

一、中国文学の外国語翻訳の現状

新たな時代を迎え、中国の翻訳事業は大きな変化を遂げ、翻訳活動の豊かさ、複雑さと創造性が十分に発揮されている。(劉雲虹、許鈞、2016) 謝天振は「2000 年余りにもわたる翻訳活動の主流であった訳入行為が大きな変化を遂げた。即ち、翻訳分野はもはや訳入行為によって独占されるのではなく、民族文化の訳出行為が現在の様々ある国家の翻訳活動の重要な分野となっている」と指摘した。(謝天振、2015: 5) この翻訳活動の新たな変化に応じて、『外语与外语教学』(外国語と外国語教学) 2017 年第 3 期の「中国文学の外国語翻訳研究」という特説欄において、筆者は中国文学を外国語に翻訳する一連の問題を提起した。「中国文学の海外での翻訳状況はどうか。海外でどのような障害に直面しているのか。その受容方法と普及効果はどうか。中国文学の外国語翻訳は翻訳研究に新たな問題を提起したのか。翻訳方法と翻訳効果の間に何か必然的な関連性があるのか。」(許鈞、2017: 1)

中国文学の翻訳活動の絶えざる発展に伴い、これらの問題に対して、翻訳学術界は多くの思考、議論、さらには論争が起こった。つまり、中国の翻訳学術界は、中国文学、特に中国当代文学の海外における翻訳と普及に関する持続的な研究を展開し、中国文学界に有益な効果をもたらした。例えば、姜智芹の『中国当代文学海外传播与中国形象塑造』(海外における中国当代文学の普及と中国イメージの構築)、曹丹紅・許鈞の『关于中国文学对外译介的若干思考』(中国文学の外国語翻訳に関する若干の考察)の全文が、『新華文摘』2014 年第 15 号と 2016 年第 9 号に転載された。また、過婧・劉雲虹の『中国文学对外译介中的异质性问题』(中国文学の外国語翻訳における異質性について)が、中国作家協会創研部報告書『2015 年中国文学発展状況』において、2015 年度文学理論の代表的成果の一つとして引用され、「海外出版や学界の一般的な状況の整理、訳本の簡単な比較にとどまらず、中国人学者の立場から文学翻訳の歴史と現状に対して省察と批評を展開している」と評価されている(中国作協創研部、2016: 18)。筆者の知る限り、この 10 年来、中国文学の外国語翻訳研究プロジェクトの多くが国家社会科学基金(NSSFC)の助成を受け、その一部は重点プロジェクトや重大プロジェクトにも選ばれた。また、多くの中国文学外国語翻訳の研究成果が教育部や省レベルの哲学社会科学優秀賞を受賞している。

中国文学の外国語翻訳は既に一定の歴史がある。新しい時代において、中国文学の翻訳は社会に広く注目され、学界から重視されたものの、一時期は賛否両論があった。その主な理由は、以下の 3 点である。第一に、中国文化の海外進出の実施過程で、中国文学の外国語翻訳は中国文化の再構築という新たな社会的・文化的意義が付与された。第二に、中国文学の翻訳活動はより複雑で多様となり、外国側の自発的な翻訳活動に加えて、過去 20 年間で中国側が主導する「訳出行為」が日増しに強化され、新たな趨勢となり、学者たちに「中译外」(中国語を外国語に訳す)のアプローチと呼ばれている。そこには検討すべき多くの重要な理論と実践の問題に触れられている。第三に、中国文学の翻訳における組織的な「訳出行為」の必要性和有効性が疑問視される。とりわけ翻訳の動機・手法・効果などに対して、学術界の絶えざる関心や思考、そして研究などを引き起こしている。

二、中国文学の外国語翻訳の変化

新時代における中国文学の翻訳、特に中国文学の組織的な「訳出行為」(許多、許鈞、2019)に関する議論と論争の過程を振り返ると、初期と比べ明確な二つの変化に気づくだろう。一つ目は、中国文学の積極的な訳出の必要性についての理解がさらに深まったこと。二つ

目は、中国文学の外国語翻訳研究がより合理的になっていること。中国文学の外国語翻訳は、中国文化の海外輸出戦略と密接に繋がっている。基本的な部分として、文学翻訳の必要性という問題は、中国文化を積極的に海外輸出する必要があるかどうかという問題と重なっている。これは、中国の学术界は当初から多くの疑問を呈し、特に文学翻訳に関しては、意外にも翻訳界や文学界から否定的な声が多く聞かれた。翻訳学界の立場から見ると、文学翻訳は受入国のニーズに基づいて行われるべきだという意見が一般的である。一部の研究者は、積極的な「訳出行為」は受け手のニーズと受容のルールに反しているため、良い結果が得られないだろうと述べる。この主張を支える人々のもう一つの重要な根拠は、文学翻訳は外国語を母語に翻訳することが大部分であり、外国語に翻訳することは非常に少ないということである。このため、中国文学の積極的な「訳出」に対する否定的意見は非常に明確である。これについて、筆者はその主要な見解を次のように要約した。「疑問派の見解は主に二つある。一つは、文化交流は双方のニーズに基づいて平等に行われるべきである。現在、中国は他国の社会状況や文化ニーズを考慮せずに、大量の人力、物資と財力を投入して自国の文化を一方的に世界に押し出す行為は、強制的にイデオロギーを輸出する嫌いがある。二つ目は、文化の交流と受容にはそれぞれのルールがある。受容のルールを無視して、一方的に我々が“良い”と思う文学と文化を押し出すことは、最終的には期待される効果を得られないだろう。」(許鈞、2017)

中国学术界はこれらの二つの見解に注目し、認識を深めている。まず、中国は自国の文化を必ずしも強制的に押し付けているわけではなく、中国を理解し、中国の需要を理解しようとする各国の要求に積極的に応えている。それと同時に、文化と精神の分野では、国々や各民族との文化交流を強化し、各民族が有する独自の文化を世界に広め、世界の文化をより豊かにするのである。次に、中国文学を積極的に翻訳することは、新しい時代に入ってからの一方面的な要望ではない。歴史を振り返ると、中国語から外国語への翻訳活動は大きな効果を収めた。過去は言うに及ばず、例えば 20 世紀の 20、30 年代、70、80 年代にフランスに赴いた中国人留学生たちの中国文学をフランス語に翻訳する活動がある。彼らの中国の古典文学、現代文学、当代文学などの翻訳作品は、フランスの文学界や読者から肯定的に評価された。この翻訳活動はロマン・ロラン (Romain Rolland) と敬隠漁、ヴァレリー (Paul Valéry) と梁宗岱などを結ぶ歴史的な縁となり、フランス語圏における中国の文学や文化の翻訳と伝播に消し去ることのできない貢献を果たし、中仏文学と文化交流をより深く促進した。歴史的立場から省察すれば、1949 年から 1966 年まで、そして改革開放以降の中国文学の積極的な「訳出」活動は、一部の学者が言うように無用なものではなく、反って大きな成果を収めており、さらなる研究が必要だと思われる。

三、翻訳研究最前線の課題と今後の趨勢

理論家として、国内の翻訳研究の状況を把握する一方、国際的な翻訳研究の進展に注目する必要もある。現在、様々な出版物、特に翻訳研究関連の出版物が増えており、それらを通じて注目を集める課題も見えてくるだろう。しかし、その関心事に正対する前に、まず最も根本的な問題を把握すべきと考える。国際的な動向がどうであれ、注目と非注目に関わらず翻訳の最も根源的課題に対する思考と研究は、いかなる時代であっても必要であり、不変であり、時代遅れになることはない。私の考えでは、ある最前線の問題それこそが根本的な問題である。例えば、フランスの翻訳理論家エドモン・ガリ (Edmond Cary) は、千年余りの文学翻訳史を貫く一本の赤い線があり、それは翻訳の忠実性という問題であると述べた。各時代にあっても、必ずこの問題は深く検討される。実際には、忠実性に対する探求は、翻訳の本質と翻訳の倫理に対する探求でもある。

第一に、通時的に翻訳の本質を考えること。翻訳の再定義や継続的な定義は、国内外の翻訳界における重要な最前線の問題であろう。数年前、謝天振が広州や上海で開催されたシンポジウムで翻訳の再定義について言及した。実際、「翻訳の再定義」は、「翻訳の継続的な定義」を意味し、これは翻訳の本質に対する追求と再考にほかならない。このような思考は、通時的見方と理論的概念化という二つに基づいている。現在の物事がすでに翻訳の本質的特徴となっており、長期的かつ通時的思考であると言うことができない。この意味では、翻訳の理論的概念化は非常に重要であり、今で言う *conceptualization* (概念化) である。翻訳の概念化 (翻訳の観念化) は、翻訳が理論になるための根本とも言える。新版の『中国大百科全书』(中国大百科全書) での「翻訳」という語は私が担当し、考えを重ね「翻訳者」を追加した。「翻訳の概念化」を言うと、主体についての検討が非常に重要である。2021年にSSCIとA&HCIの両方で検索できる国際ジャーナル『*Translation Studies*』の特集欄に掲載された「*The Conceptualization of Translation in Translation Studies: Past, Present and Future*」(翻訳研究における翻訳の概念化：過去、現在と未来) というコラムは非常に特徴的なものである。歴史に対して正しく向き合ってこそ、自分自身を正しく把握・立脚し、未来に向かって進むことができる。この意味で、通時的に翻訳の本質を捉えることは、翻訳の概念化の研究であり、科学的で動態的な翻訳史観の確立に役立つ。これは現在非常に重要な研究課題であり、長期的な探求に値する。

第二に、翻訳の認知的研究に注目すること。認知のレベル或いは翻訳活動そのものから見ると、国際的には先進的な技術に基づいて科学的研究アプローチでの量的研究が進められている。現在、海外と国内のジャーナルに掲載された論文には違いが見られる。まず、翻訳の認知的研究が神経言語学、脳科学、心理学、計算科学などを取り入れ、国際的学術誌で重要視されている。学際性は翻訳認知研究の典型的な特徴となる。次に、技術化、つまり新しい技術で研究を進める。学際性と新技術の組み合わせにより、翻訳心理、通訳心理、通訳記憶、通訳者のストレスなどに関する研究がよく行われている。このような研究は、国内ではまだ少ない。ここには非常に興味深い現象が一つある。翻訳研究または言語学研究は、国際ジャーナルでは容易に発表できる研究成果であるが、国内ジャーナルではなかなか発表できないことがある。また、国内で重要な研究成果は国際ジャーナルに発表できるとは限らない。これは、翻訳研究のルートの問題に及んでいる。我々は国内外の研究進展を把握する必要がある。

第三に、翻訳教育の研究に注目すること。国内では翻訳教育に関する深い研究がまだ足りない。今まで応用レベルと実際の問題についての研究は行われたが、翻訳教育の根本的な問題に対する検討が少ない。実は、翻訳人材の育成と翻訳教育は、「なぜ翻訳をするのか」「翻訳がどんな役割を果たすのか」といった翻訳の本質と価値に関わる重要な問題に対する思考であり、この分野の研究をさらに強化すべきだと考える。私は国際ジャーナルの匿名審査員として、翻訳教育に関する論文に特に注目している。しかし、全体として、国内外を問わず、翻訳教育に関する研究はまだ不足している。中国は長い翻訳教育の歴史があり、21世紀に入ってから、中国の翻訳教育は全面的な発展を遂げている。その経験を総括することで、翻訳人材育成の基本的な問題に対するさらなる検討が必要である。中国の翻訳学術界はこの先進的な研究分野で、大きな成果を上げられると考える。翻訳教育の今後の発展に思いを巡らすべきであろう。

中国であれ諸外国であれ、翻訳の役割は益々大きくなっており、関連言語も漸次増加している。以前は、翻訳と言えば英語翻訳、フランス語翻訳、または国連の主要言語の翻訳が主だったが、現在では社会全体で翻訳人材に対する需要が高まり、各国で翻訳を必要としている。例えば、アフリカ諸国、ラテンアメリカ諸国、「一帯一路」沿線諸国などの国々が翻訳を必要としている。それは、国際的事務に関与する過程で、言語は場合によって主権の表明や主体的身分の確立を意味するため、言語の使用は非常に重要な問題となり、多

言語翻訳は必然的なことになった。また、文化多様性の保護について考えてみよう。翻訳がなければ、言語多様性の維持も困難になる。そのため、翻訳人材の育成が非常に重要な課題である。翻訳人材の育成には検討すべき様々な問題が存在する。例えば、中米のハイレベル対話で中国側の女性通訳と米国側の女性通訳（モントレイ高等翻訳学院卒業）の訳者行為について深く研究する価値があるだろうか。このような研究は、我が国の翻訳人材育成にどのような示唆を提供できるか。私が以前述べたように、翻訳教育の分野では、中国は必ず大きな成果を上げられると思われる。なぜなら、現在、翻訳は益々重要になっており、翻訳人材に対するニーズが増えつつあるため、我が国は世界をリードできるであろう。体系の建設や多言語翻訳人材、特殊な翻訳人材の需要に応じるため、翻訳教育はより高い要求を提示され、翻訳教育研究には無限の可能性が与えられた。よって、いかに翻訳教育を実践するのか、翻訳理論研究でいかにリーダーシップ力を発揮するのか、いずれも翻訳理論界が考えねばならぬ問題である。我々は、中国の翻訳教育の経験をまとめ、国際的に発信し、またはジャーナルに「中国翻訳教育研究」のようなコラムを設けても良く、国際交流や共同研究を推進するべきである。私は、穆雷教授に、中国翻訳教育史研究は非常に重要な研究課題であり、国家社会科学基金の重要プロジェクトとして扱われるべきだと提案したことがある。思うにこの提案は、提示されるべき、または遅かれ早かれ提示されると考える。実のところ、中国の翻訳教育はかなり古い時代に遡ることができる。異なる時代や各民族の異なる発展段階、特に光を求めて闇から抜け出そうとする時代において、翻訳教育は中国が自らを超えて世界に進出する上で非常に重要な役割を果たしてきた。

第四に、中国話語¹の外国語翻訳と伝播。この問題については、学術性を最優先にしながら、対策も考慮に入れるべきである。つまり、中国話語の科学性を保証することで、中国話語の外国語翻訳と伝播は、ある意味では国家戦略と密接に関わる問題となる。具体的に言えば、学術の発展、学術の見解と思想の翻訳と伝播によって、如何にこの戦略をスムーズに実施するだろうか。ある戦略が提案された以上、それに協力したり、単調に応じるよりも、より豊かにして、さらに改善することで、そこから新しい提案を出し、中国話語が学術界のほか、あらゆる分野でスムーズに伝播できるようにする。現在のところ、文学、科学、政治、外交などの分野に関わらず、中国話語は体系的なプロジェクトとして、各分野の関心を集めている。この分野に関する報告書（コンサルティングレポート）、特に翻訳に関する重要な政策決定報告書は、最上位の政策決定層に届くこともできる。なぜこれほど関心を持っているのかというと、我々はまだ多くの問題に直面しており、対策が必要だからである。翻訳の視野から言えば、海外における中国話語の伝播のプロセス、または中国における外国話語の定着化プロセスは、そのいずれも翻訳を通じてであるが、国際的にはまだ十分に認識されていない。つまり、この分野に関する研究もまだ少ない。国内学界でも、翻訳におけるイデオロギーや政治的話語の問題について見解が食い違う時期があった。現在、翻訳が中国では全面的に展開され、学術翻訳、文学翻訳、中国話語の対外的構築がもはや非常に複雑なシステムを形成した。このシステムの中には、「翻訳原則は一体何なのか」という非常に重要なものがある。総原則に基づき、翻訳戦略と翻訳方法を決め、受容の名のもとに、翻訳の困難を避け、随意に変更することは許されない。

翻訳のルールを正しく理解するにあたり、中国の学界は、この分野の仕事を始めたばかりで、まだ多くの課題がある。例えば、海外で翻訳・伝播された中国話語と、国内で通行している話語とはどのような関係があるのか。切り離しても構わないのか。異なる読者

¹ 話語は言語やコミュニケーションに関する概念であり、現在、「話語権」も重要な概念となっている。話語権とはディスコース・パワー (Discourse Power) あるいは Discursive Power)、すなわち言説を創出し、それを国際的に受け入れさせる権力であり、フーコーの言説に関する議論（言説の創出と管理をめぐる制度と構造的権力）の国際関係論への適用であるとされている。——訳者注

や受け手によって、国内話語は翻訳の過程において様々な読者や受け手に出会ったとき、必然的に変化が起こるのか。中国の指導者の話し方は外国の受け手に中々受け入れられないと考えられる人が多いが、それは外国語の話し方が我々と異なるため、我々はその話し方に順応しなければならないのか、ここに原則的問題があるかと考える。私は他にもいくつかの例を挙げたが、これらの例はすべて、国家指導者の話し方はその独特さがあり、個人的で思慮深いものであるため、翻訳者として翻訳の原則をどのように理解すればよいのか、指導者の話し方を変更する自由度がどこまであるのだろうか。例えば、翻訳研究からすると、『毛泽东选集』（毛沢東選集）と『习近平谈治国理政』（習近平 国政運営を語る）の翻訳原則はどう異なるのか。なぜこれらの違いが生じるのか。これらの違いはどのような結果をもたらすのか。さらに、『习近平谈治国理政』はオリジナル版本がある。だが、本書の主要な思想はすでに外文局、国際放送局、外交部など、異なるチャンネルを通じて海外に伝えられており、これらのバージョンの間にも違いがあるが、この違いはどのような結果をもたらすのか。これらの研究は中国話語体系の翻訳と伝播の研究に組み込むことができる。その中には多くの課題があり、一人の理論研究者として、これらの問題を考える責任があるであろう。

第五に、翻訳史の研究は翻訳研究を推進する重要な研究分野として、翻訳学術界にさらに重要視されるべきこと。一部の翻訳史とは、中外文化交流史、中外文化思想史、中外文化の衝突と発展の歴史である。では、どのように翻訳史の研究を展開すればいいのか。最近、私は屈文生の『不平等与不对等』（不平等と不对等）を読んでいて。本書は不平等条約の翻訳史研究であり、その序文に深く感動した。不平等条約の翻訳には不对等がある。これは非常に興味深いことで、不对等な翻訳は避けられないとよく言われているが、この不平等条約での不对等は不可避なのか。不对等な翻訳と不平等な条約との間には、どのような関係があるのか。なぜこのような不对等が生じたのか。それは単に言語上の問題だけなのか。屈文生の研究は色々とし唆を与えてくれた。翻訳史の研究は、翻訳や翻訳活動の整理だけではなく、翻訳史の立場から、思想、文化、社会、文学などの様々なレベルで、歴史のリライトに新たな視野と可能性を提供し、翻訳史研究が他分野の学術研究に確実な影響を与えることができる。

四、如何に中国文学の外国語翻訳研究を深めるのか

新しい時代において、中国文学の外国語翻訳は着実に進み続け、わずか 20 年余りで重要な進展を遂げ、新たな姿が見受けられる。それは、第一に、中国の積極的な翻訳活動と海外の翻訳ニーズが相互に促進されたこと、第二に、翻訳の主体が多元化し、国内外の翻訳家が相互に協力すること、第三に、翻訳のルートが多様化し、海外の主要な出版社が多く参加すること、第四に、文学翻訳紹介が徐々に深まり、文学の特性に対する関心が高まること、第五に、文学翻訳紹介が文化交流を促進し、中国の学術著作の外国語翻訳にも貴重な経験を提供すること。このように、文学、文化、思想の交流が徐々に力を合わせている。これらの喜ばしい変化に基づいて、筆者は中国文学の翻訳研究を深める方法について、いくつか提案してみる。

第一、文学翻訳紹介と生成プロセスに関する全般的な研究を深めること。新しい時代において、中国文学の積極的な翻訳に対して、学術界は重要な課題を提起した。それは、中国文学は「ウォークアウト」(walk out) だけではまだまだ足りなく、「ウォークイン」(walk in) がもっと重要だという。ウォークアウトからウォークインまで、テキストの選択、変換、解釈や受容など、複雑かつダイナミックなプロセスを経る。この過程では、様々な影響要因が関与し、多くの矛盾が生じることがある。ある段階では、翻訳界は翻訳方法に焦

点を当て、翻訳の「忠実性」に疑問を投げかけ、その「忠実性」を否定することさえあった。目下の段階では、「リライト」が最高の翻訳方法だと考えられている。文学翻訳の歴史を振り返ってみると、特に初期には、テキストの生存のため、政治や社会の特定のニーズに応じて、削除やリライトの翻訳方法がよく使われたことが否定できない事実である。しかし、歴史的な立場から考えると、テキストの再生と存続には独自のルールがある。外国文学の中国語訳であろうと、中国文学の外国語訳であろうと、文学翻訳は本質的な特質があり、それを深く考えて探求する必要があると思われる。

文学翻訳の歴史を考察した上に、文学翻訳の「生成性」について深い研究を行った学者がいる。彼らは、原文の理解や解釈、意味の再生、翻訳作品の受容などのいずれも生成性を貫く動的なプロセスであり、時間的な継続性や空間的な拡張性を根本的な要求とする複雑なシステムでもありと考えている。劉雲虹（2017：608）は、「テキストの誕生、継続及び伝承という全過程から、また翻訳活動が位置付けられている他者との関係、及びテキスト内とテキスト外の多重要素によって形成された相互作用のシステムから、翻訳についての理解を深め、翻訳の本質的特徴を把握すべきだ」と指摘した。「文学翻訳生成論」の提唱は、特に文学翻訳生成メカニズムと受容ルールについての研究は、新時代の中国文学の外国語訳の考察と評価に重要な理論的枠組を提供した。中国文学の翻訳研究を深めるために、「テキストの新しい生命の誕生、テキストの意味の理解と生成、訳本の生命の継承と翻訳の成長」（劉雲虹、2017：608）に焦点を当てることが極めて重要である。

第二、翻訳家研究と翻訳主体性の探求を深めること。中国の翻訳史を振り返ると、世代ごとの優れた翻訳家が「民族文化を継続させる」ために、海外との「文明交流と融合」を推進し、不朽の貢献を果たしてきた。つまり、中華文明の発展や海外文化交流の歴史において、翻訳家は常にその場に存在していた。筆者は、外国文学の中国語訳にしろ、中国文学の外国語訳にしろ、多くの翻訳家の名前が作家の名前と密接に繋がっていると何度も話したことがある。例えば、傅雷とロマン・ロラン、朱生豪とシェイクスピア、莫言とハワード・ゴールドブラット（Howard Goldblatt）、余華とイザベル・ジャニーヌ・ラビュ（Isabelle Jeannine Rabut）などである。

「もし視野をより広げて、中国歴史上の翻訳活動を取り上げてみれば、仏典翻訳ならば鳩摩羅什と玄奘、西学東漸であれば嚴復、中国で西洋文学の最初の翻訳であれば林紘、五四運動前後の翻訳ならば魯迅を思い浮かべよう。これらの名前は、ある作家や思潮、流派と密接に関連している。彼らを思い浮かべると、中国の文明発展史や海外との文化交流史の躍動している生命力を肌で感じ取ることができるようになる。これらの翻訳家は、重要な精神的座標のようで、中華文明の継続と発展、海外文化との交流と相互的鑑賞についてより深い考察を促す。」（劉雲虹、許鈞、2020：77）

近年、筆者は翻訳家研究の強化を呼びかけると共に、『中華譯學館・中華翻譯家代表性譯文庫』（中華譯學館・中華翻譯家代表的譯文庫、浙江大學出版社出版）、『中華譯學館・中華翻譯家研究文庫』（中華譯學館・中華翻譯家研究文庫、商務印書館出版）の編纂に力を注ぎ、翻訳家研究を直接的に推進している。また、『中国翻譯』（中国翻譯）編集長の楊平の支持の下、同学術誌に「翻訳家研究」コラムを設けた。このコラムは、翻訳家の翻訳活動、翻訳の思考、翻訳の功績、翻訳の影響という明確な研究目的を掲げている。中国文学の外国語訳の推進とともに、中国文学と文化の翻訳と伝播に尽力している翻訳家研究は特に注目に値する。また、翻訳家研究については、テキスト変換の研究は当然重要であるものの、翻訳過程を貫く主体的な役割、及び主体的要素を分析・評価することも必要である。さらに、翻訳家が活躍した時代や文化的なコンテキストに注目し、精神的なレベルや芸術的なレベル、影響力のレベルでテキストの新しい生命を把握する必要もある。その上に、新しい資料の発掘や新しい方法の探求も、翻訳家研究の注目すべきポイントであろう。

第三、言語と美的次元の研究を強化すること。今までの中国文学の翻訳研究は、翻訳の

選択、翻訳の障害、翻訳の方法とストラテジーなど、多くの成果を収めた。例えば、海外における中国文学翻訳と伝播の障害に関しては、学界はイデオロギー、文化的コンテキスト、受容の要因などを深く考察した。その中では、翻訳の外的影響要因と読者の受容についての分析と研究は、文学翻訳紹介は複雑なシステムであると改めて認識させた。また、訳者が翻訳中にでくわす種々の困難に理論的参照を提供し、翻訳過程における種々の臨機応変な対応に理論的支援を提供した。しかし、関連研究を継続的に追いつける中で、それらの研究は、以下の 2 つの足りないところがあり、さらなる深い研究が必要だと考える。

その一つ目は言語問題の研究である。翻訳の歴史から見ると、文学翻訳の言語問題は非常に重要な問題である。魯迅は言語問題を非常に重視し、翻訳中の言語問題を中国語の豊富さ、新しい思想の吸収と国民思维の革新という高さに引き上げた。(許鈞、2021: 92) 中国文学の外国語翻訳では、翻訳者は原作の言語的特徴を認識し、処理することに特に注意を払う。多くの翻訳者は、中国語の表現の精巧さ、繊細さと具象性に対する理解が不十分なため、読者の受容を名目に、任意に変更することで対処し、原作の言語的創造性を大幅に損なっている。このような現象について、いかに確認すればよいのか。もし外国文学の中国語訳が、現代中国語の発展に深い影響を与えたとすれば、中国文学の外国語訳は、言語と思考の面で目的言語に何らかの影響を与えているのか。どのように影響を与えているのか。中国古典文学と中国当代文学の翻訳は、言語の面で提起される問題が異なっている。それぞれ異なる障害、特に抵抗性の強い言語問題に対する翻訳原則と方法について、深く検討する価値があると思う。二つ目は審美問題の研究である。文学作品の審美は、言語の次元と密接に関連している。大きなものは中国文学作品の全体的な物語と修辞から、小さなものは作品の一つ一つの言葉や文体まで、審美的次元から身に付け・再現するのか、または認知的次元から解釈・処理するのか、翻訳の結果は大きく異なっている。ある研究者は、英語圏における劉震雲の作品の翻訳と受容のケースを取り挙げて、次のように鋭く指摘した。「英語圏では、文学の伝播、文学の受容、及び商業的プロモーションという現実的利益から、意識的に劉震雲の文学創作の中で政治物語、災害物語、女性物語、社会犯罪、及び世界的な“寓話的皮肉”と“倫理的創作”などの物語の叙述手法を大げさに捉えた。」(胡安江、彭紅艷、2017: 1) このようなやり方や関連する翻訳策略の是非と得失については、より慎重な検討と厳密な分析が求められる。

上記の三つは、今後翻訳学界が特に注目すべき点である。これは、翻訳生成メカニズム、翻訳主体性、及び翻訳の言語と審美的次元での再創造などの重要な理論的問題と関連し、翻訳プロセスの分析、影響要因と翻訳策略の策定にも関連している。また、上記の問題に対して、全体を包括する根本的な問題が潜んでいると考えている。それは、中国文学の翻訳価値である。中国文学は積極的に海外進出する必要があるのか。なぜ海外での翻訳と伝播を促進する必要があるのか。どのような文学作品を優先的に海外に翻訳すべきなのか。翻訳は忠実性の原則を守るべきなのか。世界文学の構築という高さから中国文学の外国語翻訳をどのように見直すのか。中国文学の特性をどのように理解するのか。中国文学の外国語翻訳はどこまで積極的な影響を与えるのか。これらの問題に答えるためには、学界が中国文学の外国語翻訳を位置づけ、また動的な翻訳歴史観と翻訳価値観を確立する必要があると思う。

参考文献

- [1]胡安江,彭紅艷.2017.從“寂靜無聲”到“眾生喧嘩”[J].外語與外語教學,(3):1-11.
- [2]劉雲虹.2017.試論文學翻譯的生成性[J].外語教學與研究,(4):608-618.
- [3]劉雲虹,許鈞.2016.如何把握翻譯的豐富性、複雜性與創造性——關於翻譯本質的對[J].中國外語,(1):95-100.
- [4]劉雲虹,許鈞.2020.走進翻譯家的精神世界——關於加強翻譯家研究的對談[J].外國語,(1):75-82.
- [5]謝天振.2015.翻譯巨變與翻譯的重新定位於定義——從 2015 年國際翻譯日主題談起[J].東方翻譯,(6):5-7.
- [6]許多,許鈞.2019.中國典籍對外傳播中的“譯出行為”及批評探索[J].中國翻譯,(5):130-137.
- [7]許鈞.2017.當下翻譯研究中值得思考的幾個問題[J].當代外語研究,(3):1-5.
- [8]許鈞.2021.關於文學翻譯的語言問題[J].外國語,(1):91-98.
- [9]中国作協創研部.2016.2015 年中國文學發展狀況[N].人民日報,2016-5-3(18).
- [10]許鈞.2022.當下翻譯研究的前沿問題與未來趨勢——在曲阜“全國第二屆‘譯者行為研究’高層論壇上的報告”[J].北京第二外國語學院學報,44(3):4-11.

本稿は 2023-2024 年度中国国家重点社会科学基金中華學術著作外国語翻訳プロジェクトの研究課題『翻訳論』（日本語版）の助成金を得て翻訳したものである。